

子育てにおける「男の子らしさ・女の子らしさ」をめぐる 母親の葛藤と対応

ー子育て SNS の相談トピックの分析と母親へのグループインタビューからー

園部友里恵*・相良好美**

How Do Mothers Deal with the Conflicts over "Boyishness/Girlishness" in Child-Rearing?

Yurie Sonobe* and Yoshimi Sagara**

要 旨

本研究では、子育て経験のある母親たちが、就学前までの時期に子どもから「男の子らしさ・女の子らしさ」をめぐる言動、特にジェンダー・ステレオタイプに基づく言動がなされたときや、反対にジェンダー・ステレオタイプに反する選好がなされた場合にいかなる葛藤が生じるのか、またそれに対しいかなる対応をとるのかを明らかにすることを目的とする。方法としては、第1に、匿名相談機能を備えた子育て情報サイトの分析から、ジェンダーをめぐる相談トピックの抽出・分類を行った。第2に、現在幼児を育てる母親を対象としたグループインタビューを行い、母親たちのジェンダーをめぐる葛藤及びそれへの対応を分析した。その結果、たとえ母親自身が「その子らしさ」を重視した子育てをしたいと望んだとしても、「男の子らしさ・女の子らしさ」という呪縛からは逃れられず「不安」や「複雑さ」や「息苦しさ」を感じてしまうことが明らかになった。

キーワード：子育て 母親 男の子らしさ・女の子らしさ

1. 背景と目的

本研究の目的は、子育て経験のある母親たちが、就学前までの時期に子どもから「男の子らしさ・女の子らしさ」をめぐる言動、特にジェンダー・ステレオタイプに基づく言動がなされたときや、反対にジェンダー・ステレオタイプに反する選好がなされた場合にいかなる葛藤が生じるのか、またそれに対しいかなる対応をとるのかを明らかにすることである。

子育てとジェンダーをめぐることは、これまでも様々な視点から研究がなされてきた。仁科 (2018) は、母親たちの抱える困難とそこから生じるニーズの検討から、信頼できる子どもの預け先の確保の必要性を指摘している。また、國吉 (2020) は、「ジェンダーフリー」な子育てへの心理療法の活用について検討している。加えて、父母のジェンダー意識を扱った研究も、学会の口頭発表として報告されている。例えば、子どもの性別による育て方の違い (中島・阿蘇・遠藤 2017) や、父母のジェンダー社会化志向の強弱と母親が抱く子育て不安の関連 (石黒 2010) について明らかにしたものがある。

また、「育児メディア」を対象とした研究もみられる。仁科 (2018) は、育児メディア研究には、育児雑誌や母子健康手帳及びその副読本を分析対象としたものがあると整理し、「育児メディアの中で父親の存在感が増大し続けているにもかかわらず、それが必ずしもジェンダー平等な育児には繋がっておらず、むしろ子ども中心の子育てが規範となり、個人の選択や責任が強調されることで子育てというケア

* 三重大大学大学院教育学研究科

** 東京大学大学院教育学研究科

を行っている母親や家族の負担が増大している可能性について読み取ることができる」(p.86-87)と述べている。

このように、これまでの子育てとジェンダーに関する研究は、子育てを誰が担うのかという視点から、特に母親への集中について扱うものが主流であると言える。しかし一方、親と子どもの関係におけるジェンダーの問題を扱った研究は、管見の限りみられない。そこで、本研究では、「子どもの言動」と「母親の認識・対応」に着目し、母親たちと子どもとの関わりのなかで「ジェンダー」がいかに内包されているのか、そして母親たちはそれらにいかに向きあっているのかを捉えていくこととする。

また、本研究は、筆者ら自身が「母親」であるということからも出発している。第一著者は、当初からジェンダーに対して問題意識を持っていたわけではなく、ジェンダー論を専攻してきたわけでもないが、自身の妊娠・出産・子育てをきっかけにジェンダーについて関心を抱き始めた。そして、自身の子どもが1歳になる頃、ジェンダーに関する書籍のオンライン読書会を開催するようになった。本研究の出発点にあるのは、読書会のなかで第二著者が語った、「お母さん、男の子は髪の毛結んじゃいけないんだよ」と自身の子どもから言われたというエピソードである。子どものジェンダー意識は、2歳ごろから形成され始めるという(作野 2008)。第一著者は、今後、自身の子どもが成長していく過程で、もし自身の子ども(4歳女児)からジェンダー・ステレオタイプ的な言動がなされたとき、それに対して母親としていかに対応していけばいいのかと不安になった。そこで、「先輩の母親たち」はそうしたことにいかに向きあっているのかを知りたいと感じるようになったのである。

2. 対象と方法

本研究は、[研究1]と[研究2]で構成されている。[研究1]では、子育てSNSの相談トピック分析を、[研究2]では、母親へのグループインタビュー分析を行う。

2.1 [研究1]の対象と方法

[研究1]の対象は、匿名相談機能を備えた子育て情報サイトである。この匿名相談機能は、アプリをダウンロードすれば無料で閲覧、投稿することが可能となっている。本研究では、アプリの相談コーナー内に設置されている相談検索機能を活用し、「男の子らしい」「女の子らしい」という言葉を含む相談を抽出する。抽出にあたっては、2021年9月15日を最新とし、最新のものから遡りそれぞれ100件分の抽出を試みた。

その結果、「女の子らしい」という言葉を含む相談については、2020年10月5日から2021年8月29日に投稿された計100件が抽出された。対して、「男の子らしい」という言葉を含む相談については、2019年11月24日から2021年9月14日に投稿された計79件が抽出されたが、それ以前のものについては検索機能からは抽出できなかった。

本研究では、上記抽出された計179件の相談を対象として、各相談の内容を確認しラベリングを行った。そして、ラベル間の類似点・相違点を踏まえ、著者間で協議の上、カテゴリを構築した。なお、[研究1]を行う主要目的が[研究2]のグループインタビューにおいて母親たちの語りを引き出す点にあることから、各カテゴリにおける相談件数については記載しておらず、量的な検討も行っていない。

2.2 [研究2]の対象と方法

[研究2]の対象は、子育て経験のある母親たちである。第二著者が利用するTwitterの匿名アカウントにてインタビュー調査への協力者を募る書き込みを投稿したところ、2~4歳の子どもをもつ30代の

母親3名の協力を得ることができた。Aさんは4歳女兒と2歳男児の、Bさんは4歳女兒の、Cさんは2歳男児の母親であった。なお、第一著者及び第二著者と協力者、協力者間には直接の面識はない。

表1 グループインタビュー調査協力者

子どもの年齢と性別	
Aさん	4歳女兒、2歳男児
Bさん	4歳女兒
Cさん	2歳男児

本研究では、上記3名の母親たちへのグループインタビューを分析対象とする。グループインタビューは、2021年10月6日（水）21:00-22:30にオンライン（Zoom使用）で実施された。参加者は、上記3名の母親たち、第一著者及び第二著者の計5名であった。インタビューは、半構造化形式をとり、表2に示したインタビューガイドに沿って進められた。特に、調査者（第一著者・第二著者）も「母親」であることから、自身の子育ての悩みを伝えるようなかたちで話題提示すること、そして調査者や他の協力者の語りに触発されたことも含め自由に語ってもらうことを重視した。事前に、「子育てのなかで、お子様の性別を意識する場面はありますか」「子育てのなかで、「男の子らしさ」「女の子らしさ」を意識していますか」という2つの質問を用意しておいたほか、後半には〔研究1〕で明らかとなったSNSの相談トピックを示し、そこから想起されたことも語ってもらった。

表2 インタビューガイド

① 調査概要の説明、録音及び逐語録作成の許可、同意書への記入
② 自己紹介（名前（調査内で呼ばれるもの）、子の年齢と性別、その他）
③ 調査者からの話題提示
・子育てのなかで、お子様の性別を意識する場面はありますか。
・子育てのなかで、「男の子らしさ」「女の子らしさ」を意識していますか。
④ 〔研究1〕の結果の提示
・SNSの相談トピック（表3）を見て思い出したことがあれば教えてください。

3. 〔研究1〕 結果と考察

子育てSNSの相談トピック分析の結果、「男の子らしい」「女の子らしい」という言葉を用いてなされる相談には、【名付け】【衣服・持ち物】【遊び】【言動・性格】【容姿】【胎児性別】【その他】というトピックがあることが見出された（表3）。

なお、【胎児性別】については、本研究がテーマとする「ジェンダー」をめぐる相談というよりも、例えば「お腹の子は女の子らしいのですが、……」などというように、「男の子らしい」「女の子らしい」という言葉が「推定」の意で用いられていた。また、【その他】には、母親と子どもとの関係をめぐる相談ではなく、例えば「実母から男の子らしいお腹の出方だと言われたのですが、……」などというように、母親自身の身体面・精神面の変化を扱ったもの等を分類した。

そこで、以下では、【名付け】【衣服・持ち物】【遊び】【言動・性格】【容姿】という5つのトピックについて、それぞれの代表的な相談例に触れながら考察していく。なお、その相談が自身の子どもに關す

るものである場合、各相談例の末尾に、その相談がなされた時点での子どもの年齢と性別を（ ）内に示すこととした。

表3 抽出されたカテゴリ（子育て SNS の相談トピック）

大カテゴリ	中カテゴリ	説明・例など
名付け		名前（使用する漢字、読み、響きなど）
衣服・持ち物	キャラクター	
	ブランド・店	
	色	
	デザイン	柄（花柄など）、形状（スカート、フリルなど）
遊び	玩具・絵本	遊びに使用する「モノ」（人形、ミニカーなど）
	遊び	遊びの方法・ルール（おままごと、戦隊モノごっこなど）
言動・性格		
容姿	顔	
	髪型	
胎児性別		※「推定」の意
その他	妊娠中の反応	母親自身の身体・精神面の変化など
	その他	

3.1 名付け

1 つ目は、「名付け」に関する相談である。同じ「名付け」に関する相談であっても、その趣旨は異なっている。例えば、胎児の性別に「合う」名前の候補を探していたり、自身の考えた名前が胎児の性別に「合う」かを尋ねていたりする相談がある一方で、性別問わず名付けることができそうな「中性的な名前」の是非を問う相談もある。

- ・男の子に〇〇とつけたいが、漢字を悩んでいる。男の子らしい漢字を教えてほしい。（妊娠中（男児））
- ・男の子女のどちらにもつけられる、中性的な名前をどう思うか。学校や病院などで名前だけでは性別が判別できない名前を皆さんならつけるか。義親に、女なら女の子らしい名前、男なら男とはっきりわかる名前にしなさいと言われている。（妊娠中）

3.2 衣服・持ち物

2 つ目は、「衣服」や「持ち物」に関する相談である。これらは、中カテゴリとして「キャラクター」「ブランド・店」「色」「デザイン」が生成された。

「キャラクター」については、主に男児の母親から相談がなされていた。例えば「ミッフィー」や「ドキンちゃん」など、一般に「女の子らしい」とされるキャラクターを自身の子ども（男児）が好んでしまい悩んでいるというものであった。「ブランド・店」については、例えば「男の子らしい T シャツを売っているブランドを教えてほしい」など、自身の子どもの性別に「合う」衣服を扱う店を知りたいといった内容であった。「色」については、主に男児の母親からピンク色をめぐる悩みが書き込まれていた。「デザイン」については、花柄などの柄に関する相談や、スカートやフリルなどの形状に関する相談がみられた。

3.1 と同様、母親自身が「男の子らしい」「女の子らしい」ものを好んでいる場合と、そうでない場合の両方の相談がみられた。また、入園グッズや友達の出産祝いなど、第三者の目に触れるものについての相談がほとんどであった。その際、「無難」という言葉が用いられるように、「男の子らしい」「女の子らしい」に縛られないものを選びたいという思いを持ちあわせながらもその思い通りに行動できない様子もうかがえた。

- ・長男の入園グッズ、自分の影響でミッフィーが好きだが、無難にカーズなどの男の子らしいものにしておこうか悩んでいる。(3歳男児)
- ・友達の出産祝いに靴をあげようと思っている。3人目で念願の女の子のようなので、女の子らしいものが欲しいとのことだったが、ピンクだとやりすぎか。無難な色の方がよいか。
- ・上の子が女の子で下の子が男の子の場合、上の子のお下がりには気にせずに使ったか。例えば、女の子らしいピンクのおくるみやピンクのコートは使うか。赤ちゃん時代ならありかと思うがどうか。(4歳女児、妊娠中(男児))
- ・私は性別に関係なく個人を尊重したいタイプだが、夫は、「男の子は男の子らしい色の服を着るべき」「ピンクなんて着せちゃいけない」と言う。もうそんな時代じゃないと思うし、息子が私と同じ嫌な気持ちになるのが嫌。夫にどう伝えればいいか。(0歳男児)

3.3 遊び

3つ目は、「遊び」に関する相談である。人形やミニカーや絵本など、遊びに使用する「モノ」に関する相談のほか、おままごとや戦隊モノごっこなど、遊びの方法やルールに関する相談もみられた。ここでも、3.2 同様、異性きょうだいに関するものや、家族との意見の相違があったときに相談がなされていた。また、自身の子どもが性別に「合う」遊びを好まないことで「いじめ」の対象にならないか心配する相談もみられた。

- ・1歳の女の子は何して遊ぶか。上がお兄ちゃんでも女の子らしいおもちゃが足りない気がしている。(1歳女児・2歳男児)
- ・母は、男の子だから男の子らしいおもちゃがいいという考え。子ども用キッチン、男の子なのにキッチングッズなんてだめだと言う。(1歳男児)
- ・息子は闘争心があまりない。男の子らしい遊びが好きでなく、スポーツも苦手。学童に通うがいじめられたりしないか。(6歳男児)

3.4 言動・性格

4つ目は、「言動」や「性格」に関する相談である。「男の子らしい」ものとして「乱暴」「やんちゃ」、「女の子らしい」ものとして「ほんわか」などといった言葉が用いられており、自身の子どもが性別に「合う」言動をしない場合に悩んでしまう母親の相談がみられた。また、他に比べ件数は少ないが、「性同一性障害」という言葉を挙げながら、自身の子どもが実際とは異なる性自認をする言葉を発したことを気にかける母親の相談がみられた。特に、こうした相談は、男児の母親からなされていた。

- ・日に日に口が達者になり可愛らしさが全くなくなってきた。ほんわかした女の子らしいものの言い方をしてほしいが反対反対へといってしまう、そんな娘を見ると悲しさとイライラが増す。アドバイスがほしい。(2歳女児)
- ・4歳男の子の話し方や行動はどんな感じか。周りの子は「うるせー」「○○しろー」「○○だぜ」など、乱暴な、男の子らしい話し方をしている。自分の子はそうではないので、周りの子につまらないと思われていないか不安。(4歳男児)

- ・性同一性障害はいつから診断できるのか。以前から女の子らしい子だとは思っていたが、保育園で「男の子はこっち、女の子はこっちに集まって」と声かけがあると息子だけどちらにも行けなかった様子。先生が「〇〇くんは男の子？女の子？」とたずねると「うーん、女の子？」と答えた。息子が娘だったとしても受け入れるが、どうしても気になる。(4歳男児)

3.5 容姿

5つ目は、「容姿」に関する相談である。「顔」に関するものと、「髪型」に関するものがみられた。「容姿」に関する相談は、実際とは異なる性別に間違えられる、特に、実際には女兒であるにもかかわらず男児に間違えられてしまうエピソードを含むものが大半であった。

- ・外に出る時、ピンクや赤を着ないと毎回男の子に間違われる。娘の顔は100%夫似であり女の子らしい色が似合わない。女の子に見られるような方法はないか。(0歳女児)
- ・娘は髪の毛が全然増えない。少ない髪の毛だった子はいつ頃伸びたか。伸びると女の子らしいので。(0歳女児)
- ・上の子は男の子らしい顔なのでソフトモヒカンだが、下の子は女の子に間違われるのでさっぱりしてかわいらしい髪型にしたい。男の子のかわいい髪型をみせてほしい。(3歳男児・2歳男児)

3.6 小括

以上、子育て相談 SNS のトピック分析から、母親たちは、SNS 上の相談コーナーにおいて、主に【名付け】【衣服・持ち物】【遊び】【言動・性格】【容姿】に関して相談していることが明らかとなった。

どのようなときに相談がなされているのかという点に着目すると、身近な人に相談できないとき、家族や友人等へ贈り物をしたいとき、家族との意見が異なるとき、自身の子どもの嗜好が周りの子どもと異なるときなど、母親と子どもの関係だけでなく、そこに第三者が関係する場合に相談がなされていると考えられる。

また、今回は考察の対象としなかったが、【胎児性別】に関する相談が多く存在していることから、母親たちは、自身の子どもが胎児の頃から子どもの性別を意識したり、自らは意識していなくても第三者からのまなざしによって意識せざるを得ない状況に置かれたりしていることもみえてきた。

4. 【研究 2】 結果と考察

次に、母親たちへのグループインタビューの結果をまとめ、考察していく。以下、母親たちの語りを引用しながら詳述していくが、() 内は筆者らによる補足、(=) は筆者らによる言い換え、(…) は中略を示している。

4.1 「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化させないような子育てをめざして

まず、グループインタビューの協力者 3 名全員が、「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化させないような子育てをしようと考えていた。4歳女児と2歳男児の母親である A さんは、長女が保育園の年中クラスに入った頃の言動を挙げながら次のように語る。

上の子がちょうど年中に入ったぐらいから、赤は、ピンクは女の子の色とか、青は男の子の色、みたいなことを言ったり、「プリキュア」が好きなんですけど、男の子はそういうの見ないよ、みたいなことを言う機会が増えて。親(=自分)があんまりそういう言い方をしてこなかったので、保育園の影響なのかなと思うんですけど、知らないところで、性差をつけているような気がして、個

人的にはちょっとモヤモヤ、する場面が出始めました。(…) あんまりその、色で、何色とか、っていう話は、どちらかというとしないように、どっちでも、そこに性別のイメージをつけないようにしたいなと思ってたんですけど、あっさりとしてしまったので、まあ、簡単につくもんなんだなと、思いました。(Aさん)

また、Aさんと同じく4歳女兒の母親であるBさんは、Aさんの語りを聞き、自身の子どもの言動を次のように振り返っている。

先ほどAさんが言ってたような、女の子は「プリキュア」が好きなんだよみたいな、まさにやっぱり、どこかで聞いてきたのか、言ってる、うちも、あまりそういう性別で、何色が好きとか何が好きとか、区別を、するようなことを言わないように、どちらかという心にかけている家なので、どこで聞いてきたんだろうなっていうのは全く同じで、思うんですけど。(Bさん)

対して、2歳男児の母親であるCさんは、現時点では自身の子どもから「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化するような言動はなく、自身も「性別にこだわる」ことをしなくてもいいと考えているが、自身が子どものものを選ぶときには、「無意識に」、「最低限おかしくないもの」を選んでしまうという。

うちの子まだ2歳で、プリキュアとか戦隊モノ、ヒーローモノには、全然興味はないんですけど。私も、男の子でもピンクを着ていいと思っていますし、女の子でもズボンとか、性別にこだわる服装をしなくていいんじゃないかなと思いつつ、何かやっぱり、選ぶときには花柄とかをやったり避けてしまったりとか、男の子が最低限着てもおかしくないものを、やっぱり無意識に選んでしまいます。(Cさん)

4.2 「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化した言動への対応

自身の子どもから「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化したような言動がなされたとき、母親たちはいかなる対応をとろうとしたのか。4.1で触れたように、実際に自身の子どもからそうした言動のあったAさんとBさんの対応についてみていく。

Aさんは、上の子が「ピンクは女の子の色」と発言したときのことを次のように振り返っている。

別に男の子がピンク好きでも、女の子が黒好きでも青好きでもいいんじゃない？、みたいなのと、そのときたまたま多分、自分が黒っぽい服とか、元々黒とか白が多いんですけど、着てたので、ママ今黒い服着てるよ、って言って、ママは黒が好きだし、でもピンクも好きだし、っていう感じで言っていました。(Aさん)

また、Bさんも、色に関しての子どもの発言を例に挙げながら、次のように語っている。

男の子は青でとか、多分そんなような話だったと思うんですけど、似たタイプのことを口走ること、ちょいちょいあって。もう3歳ぐらいから、うち結構言葉が達者なので、よく言ってたんですけど、そうすると、あんまり深刻にこう、何だろう、言い返しちゃうと、すごく口が達者な分、ガガッと言い返されてしまうので、軽く、でもどっちでもいいんじゃない？、とか、好きなのを着ればいいんじゃない？、とか、軽い感じで、でもこういうのもいいんじゃない？、とか、ふわっと言うようにはしてました。それがどう伝わってるかはわからないんですけど。(…) 考え方として固定してほしくないなっていうところはあるので、否定にはならないように、言ってます。(Bさん)

このように、Aさんは「ママは」という表現を用いて、Bさんは「軽い感じ」で「否定」しないような表現を用いて、自身の子どもの「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化する言動に対応していた。

4.3 「その子らしさ」≠「男の子らしさ」「女の子らしさ」だったときの不安

「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化しないということは、言い換えれば、「その子らしさ」を

大切にすることでもあり。しかし、母親が子どもの性別にとらわれず「その子らしさ」を大切にしたい子育てをしたいと考えていたとしても、自身の子どもがどのようなものを好むかはわからない。

例えば、自身の子どもが「男児」であるのに、一般に「女の子らしい」とされるものを好んだとき、母親がすぐにそれを受け入れられるのだろうか。以下の A さんの語りは、姉の真似をして「髪の毛を縛りたがる」弟に関するものである。

上の子（女児）には、朝髪の毛縛るんですけど、保育園に行くとき邪魔にならないように。（…）
 下の子（男児）も髪の毛を一緒に真似して縛りたがるんですけど、そういう時期みたいで、そういうのも別に否定はしないしやるんですけど、何か、ネタみたいな感じでやってるというか。全くおんなじ気持ちで、上の子と同じように縛りたくてやってるかっていうと、ちょっと違う気がします。
 上の子は、やってかわいいというちょっと親の自己満足が入っていて、下の子はこれ完全に笑いのネタだなみたいな気持ちでやっているという。ちょっとその、今年だからやってあげられてるけど、これが果たして、もっと大きくなったときに、上の子と同じようにやってあげられるのかって
いうのはちょっと、あの、内心、自信がないです。そうしたくないと思いつつ、そこで戸惑う自分
がいるのかなと思います。（A さん）

また、A さんは、こうした「自信のなさ」を感じる理由を、次のように語っている。

やっぱりまだ、それをやることを当たり前のように受け入れてくれないんじゃないかなってちょっと不安はありますよね。世の中の考え方的に、乳幼児がやるのはかわいらしいで済むと思うんですけど、これが小学生中学生ぐらいになったときに、まあそういう子もいるよねって皆が受け入れてくれるのかなっていうのはちょっと不安です。（…）そこまで強く、不安とかすごい困ってるとかでは、別にないんですけど（…）でも子どもが、それでつらい思いをしたら、嫌だなみたいな。ちょっとマイノリティ側で、それを、強く否定されたとき、場面があると嫌だなっていうぐらいですかね。（A さん）

つまり、子どもの周りの人々や「世の中」が「その子らしさ」を大切にしているという確信を持っていないことが、A さんの「不安」を生み出していると言える。

4.4 「その子らしさ」＝「男の子らしさ」「女の子らしさ」だったときの複雑さと息苦しさ

では、自身の子どもが、一般に「男の子らしい」「女の子らしい」とされる、性別に「合った」ものを好んでいる場合はどうか。この点については、B さんと C さんから語られている。

B さんは、自身の母親も「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化するような子育てをしてこなかったことに触れている。以下の語りからは、B さんがそうした考えを受け入れる一方で、子どもが好きなものを「否定」「抑圧」したくないという思いも持ち合わせていることがわかる。

私の母も（…）ジェンダーで、差が出てしまうっていうのを非常に避けている人で。（…）私結構小さい頃の、格好とか写真とか見ると、女の子らしさを割と排除した格好、母の好みではあるんですけど、あんまりフリフリとか、ピンク、みたいなのを、どうも母が嫌がって着せないようにして
いたらしくって。なので、私も、女の子らしくしなさいみたいなことは言われなかったことについて、感謝はしているんですけど、それでもやっぱり、何だろう、皆さんさっきおっしゃったようにプリンセスの、（…）そういうの、自然にあるかと思うんですけど、幼児の感覚で、フリフリのお姫様みたいな格好に憧れるみたいなのを、ちょっと逆に抑圧されてたところがあっ
て。なので自分としては、男の子だから女の子だからっていう、そのらしさにこだわることはしたくないけれども、例えば娘がいわゆる女の子らしい格好を好んだり、女の子らしい、ほんとにディズニーのプリンセスとかプリキュアとか、そういうの好きで、なりたがってたとしても、それを否定したり、

抑圧したりはしたくないなっているというのは、思っている。何かちょっと複雑な感じで、自分のなかではあります。(Bさん)

Cさんは、「ジェンダーフリー」という言葉を用いて語っている。自身の子どもの好みが一般に「男の子らしい」「女の子らしい」とされるものと同じであったとき、「ジェンダーフリー」という名のもとに「排除」されてしまうのではないかということに「息苦しさ」を感じているようである。

昔ってランドセルって、男の子は黒、女の子は赤、だったんですけど、最近ほんとに色んな色があって、男の子も女の子も、自由に好きな色、選べるじゃないですか。そのへん、何か、ジェンダーフリーに、なってきたは、いるとは思うんですけど、逆に、男の子らしさ女の子らしさ、が、何て言うか、排除するとか、ジェンダーフリーであるべきみたいなのが気になって。うーん、何だろう、個人の趣向は別にいいんですけど、何か社会のなかで、ジェンダーフリーであるべきみたいなのが先行しちゃうと逆に何か息苦しいような気がします。(…)何か、男の子らしさ女の子らしさ、そもそも、何だろう、うーん、そうですね、それ自体別に、よくも悪くもないし、私は、あってもいいようにも、思うんですよね。(Cさん)

4.5 小括

以上、母親たちへのグループインタビューの語りを見てきた。まず、特徴的であったのは、グループインタビュー協力者全員が、「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化させないような子育てをしようと考えていたことである。そして、そうした考えから、自身の子どもから「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定的に捉えるような言動がなされたときの対応についても語られた。また、そうした言動を受け止め対応しようとする過程で、自身が「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化させないような子育てをめざしていたことから、「不安」や「複雑さ」「息苦しさ」を感じていたことが明らかとなった。

5. 総合考察

5.1 まとめ

本研究の目的は、子育て経験のある母親たちが、就学前までの時期に子どもから「男の子らしさ・女の子らしさ」をめぐる言動、特にジェンダー・ステレオタイプに基づく言動がなされたときや、反対にジェンダー・ステレオタイプに反する選好がなされた場合にいかなる葛藤が生じるのか、またそれに対しいかなる対応をとるのかを明らかにすることであった。[研究1]では、子育て相談 SNS のトピック分析から、母親たちは、SNS 上の相談コーナーにおいて、主に【名付け】【衣服・持ち物】【遊び】【言動・性格】【容姿】に関して相談していることが明らかとなった。[研究2]では、「男の子らしさ」「女の子らしさ」を固定化させないような子育てをしようと考えていながらも「不安」や「複雑さ」や「息苦しさ」を感じてしまうことがみえてきた。

本研究が捉えようとしたのは、「その子らしさ」と「男の子らしさ・女の子らしさ」のあいだに起こる葛藤の様相である。本研究を通して、たとえ母親が「その子らしさ」を重視した子育てをしたいと望んだとしても、「男の子らしさ・女の子らしさ」という呪縛からは逃れられないという姿がみえてきた。それは、他者とかかわり、他者の目にさらされながら生活していかなければならないからである。保育園で自身の子どもがどうみられるのか、他の子どもたちや周りの大人たちが自身の子どもを受け入れてくれるのか、周りからの反応で自身の子どもが傷つかないか。そうしたことが母親たちの「不安」や「複雑さ」や「息苦しさ」を生み出していると考えられる。

また、[研究1]では、SNS 上の相談コーナーにおける記述を扱ったが、本研究の結果からは、SNS に

おける相談内容と実生活における相談内容の質の違いも垣間見える。「ジェンダー」は、日頃意識されにくいものであり、また、相談するとしても実生活では相談しづらいものの1つと言える。例えば、自身の「ジェンダー」に関する価値観が家族と異なるときなど、実生活では相談しづらい内容が SNS という匿名性が担保された場で相談されていた。また一方で、SNS 上においても、相談している本人が「これはジェンダーの問題だ」と認識していない場合も少なくないように見受けられた。

5.2 今後の課題

今後の課題としては、主に次の3点がある。

第1に、検索ワードの再検討である。本研究では、「男の子らしい」「女の子らしい」という言葉に限定したが、類似の言葉は他にも存在している。例えば、「～なのに」「～だから」「～だし」「～らしく」「～なので」「～だけど」「～向け」「～みたい」「～のくせに」などである。また、「男の子」「女の子」以外にも、「男」「女」「男子」「女子」などといった言葉もある。そうした言葉にも目を向けながら、今回見出したトピックの再検討を行いたい。

第2に、相談への返答も含めた SNS 上のやりとりの分析である。本稿では、相談トピックの抽出を行ったが、今後、なされた相談に対していかなる返答がなされているのか、そして SNS という場であるからこそできる相談の特徴とは何かを検討していきたい。

第3に、「母親」以外の、子育てに関わる人々の視点からの検討である。本稿では「母親」に焦点化したしたが、例えば母親の「パートナー」はそこにいかに関わったのかなど、子育てとジェンダーをめぐる葛藤や対応を、多様な役割を担う人々の視点から捉えていきたい。

引用文献

- 石黒万里子 (2010) 「父母のジェンダー意識と子育て不安」 日本教育学会大会研究発表要項 69, p. 430-431.
- 國吉知子 (2020) 「母なるものの本質的機能：親子相互交流療法(PCIT)によるジェンダーフリーな子育て」『女性学評論』34, p.1-20.
- 作野友美 (2008) 「2歳児はジェンダーをどのように学ぶのか：保育園における性別カテゴリーによる集団統制に着目して」『子ども社会研究』14, p.29-44.
- 中島美那子・阿蘇沙織・遠藤栞里 (2017) 「男児・女児の育て方とジェンダー」日本家政学会研究発表要旨集, 69, p.258.
- 仁科薫 (2018) 「子育ての困難とケアの倫理に基づく子育て支援政策の可能性:子どもの預かりをめぐる母親たちの語りの分析から」『国際ジェンダー学会誌』16, p.81-102.

謝辞

お忙しいなかグループインタビュー調査にご協力いただいたAさん、Bさん、Cさんに心より感謝申し上げます。なお、本稿は、日本質的心理学会第18回大会において実施した口頭発表「子育てにおける「男の子らしさ・女の子らしさ」をめぐる母親の葛藤と対応：子育て SNS の相談トピックの分析と母親へのグループインタビューから」（発表者：園部友里恵・相良好美）でのディスカッションを踏まえ執筆したものです。同大会において発表に対してコメントをくださった先生方に感謝の意を表します。